

ペスタロッチ『読書ノート』(1785~1796/97)の 未公刊手稿の研究 I

—問題の提起とみとおし—

宮 崎 俊 明

Die unveröffentlichten Manuskripte J. H. Pestalozzis
„Bemerkungen zu gelesenen Büchern“ (1785~1796/97) I
Toshiaki MIYAZAKI

I 問題の所在

1. テキストの不完全さ

以前、筆者は「ペスタロッチ『読書ノート』の構造と思想—その社会批判, 人間学構想および教育思想—」(本誌, 第30巻, 1979, 31~67)と題して若干の考察をしたことがある。今回の本稿ではチューリヒ中央図書館および東独教育学アカデミー^{フュルヒーフ}古文書文庫が蔵するこの『ノートの手稿(以下MSと略記)』といわゆる批判的全集¹⁾(以下KAと略記)所収のテキストとを照合し、後者への未収録部分を確認した結果、そこでえた一定程度の知見と、さらなる研究のいわばもくろみの提示を課題とする。なお、その未収部分の転写の発表は、別の機会に譲る。

1785年から96/97年にわたる『ノート』の執筆時期が、初期では『リーन्हルトとゲルトルート』の陰にかくれ、末期では『探究』草稿、執筆、公刊の時期と重なるにもかかわらず、未定稿等のためやその他の事情で最近の重要な先行研究でKAのそれにふれたのは五指を出ない。そこでのとり

鹿児島大学教育学部 教育学科

本稿および今後のこの『読書ノート』研究に筆者が、1982年6月~83年11月に西ドイツ、スイスに滞在中多くの研究費助成や助言、友好、紹介をうけた機関や個人の主なものは、次のとおりである。記して感謝したい。DAAD(ドイツ学術交流会)、DFG(ドイツ学術振興会)、Universität Marburg, Universität Bonn。基礎資料では Zentralbibliothek Zürich, Akademiearchiv der Pädagogischen Wissenschaften der Deutschen Demokratischen Republik。二次資料では Universitätsbibliothek Marburg, Zentralbibliothek Zürich, Pestalozzianum Zürich, Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen, Universitätsbibliothek Basel, Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel ほか多数の図書館。研究の推進等についてはマールブルク大学の W. Klafki, L. Froese, R. Pippert, H. Stübiger, ボン大学の J. Derbolav の諸教授、批判版や書簡集全集の監修者 E. Dejung 博士、ベルリン教育大学(当時)の A. Rang 教授、スイスのザンクト・ガレン師範学校校長の H. Roth 博士、チューリヒ大学の A. Brühlmeier 講師。第一次資料では、チューリヒ中央図書館古文書部部長の J.P. Bodmer 博士、とくにその転写については Hessisches Staatsarchiv Marburg の F. Wolff 博士と R. Pelda 氏。

なお、本稿は昭和60、61年度文部省科学研究費一般研究(C)の一部でもある。

あげ方も職業教育論やとくに意志自由論に限られ、量的にも最大限10ページ程度にとどまっている²⁾。A. Israel 以降の3種のビブリオグラフィーほかにもこの『ノート』を単独に表題化したモノグラフィーは記載されていない³⁾。

先行研究の場合は、筆者の旧稿もふくめ、その使用テキストは H. Schönebaum が整理して KA 版の第9巻 (301~439)、第10巻 (21~28, 205~248)、第11巻 (15~28⁴⁾, 39~40) に1930~33年に公刊されたものであり、そこでの言及は、そのうち第9巻の一部、ペスタロッツの執筆時期でいえば1785年度から翌年秋の段階のものにすぎない。この『ノート』のテキストの定型のなさや校定上の難度は、KA の編集方針である テキスト・クリティーク (Textkritik)、事項説明 (Sach-erklärung)、単語説明 (Wörterklärung)、および人名地名索引 (Namen- und Ortregister) で構成される付説 (Anhang) のいずれをももたず、むしろ前二者については本文中に解題風に部分的に示され、後二者はその対象外におかれた事実でも判明しよう。また、そのために印刷上の活字ポイントが下げられた文字どおりの不完全テキストとなっている。かかるあつかいの事例には、KA 全28巻 (うち第17, 24巻はA, Bの2分冊) での幾多の草稿のなかでも、『ゲルトルート』の草稿の草稿ともいべき「準備と構想」(13. 360~389)⁵⁾ ほか12点が見出されるが、その多くが成稿となって定着したのに反し、この『ノート』は分量では一番多く、時期についてももっとも初期のものに属している。いわばペスタロッツ研究の最大の難関といえるだろう。

テキストの確定こそ、研究に第一次の基本作業であるが、そのさい KA の第9巻以後の19巻分と書簡集全13巻のとに45年にわたり共同ないし単独で従事した E. Dejung を筆頭にしても、シェーネバウムが戦前に7巻分に参加し、この『ノート』の転写と解題の担当をした役割は、ペスタロッツ研究にひとつのエポックを画した精神史的研究の立場で公刊した浩瀚な自伝的四部作とともに特記されるべき業績である。

ただ、一般に校定における底本の確立が、MS の転写 (Transkription) の段階で複雑化し、一義的たりえない。その事例としてわれわれがもつ『隠者の夕暮』の場合を一瞥すれば、W. Feilchenfled Fales による、KA 第1巻におけるその文献批判は、Ephemeriden der Menschheit (Bd. 1, St. 5, Mai 1780) と、Niederer 本ともいべき Wochenschrift für Menschenbildung (Bd. 1, St. 13, 14, 1807) に発表のもの、および草稿の3種に依拠している。また、その後に発表された H. Rupprecht⁶⁾によるテキストは、彼自身その前段で『夕暮』の表現のフォームをとらえ、テキストの構造とそれに批判的照明を加える予備的作業をおえたあと(1934)、草稿と完稿との MS がもつ表記の原型の徹底的な回復をはかり、かつファクシミリをそこに添えて示した。児玉三夫⁷⁾もわが国で1973年にコッタ版の復刻をしたさいの『夕暮』MS に係わる作業をし、同じくファクシミリを添えている⁸⁾。ルプレヒトと児玉は、MS の改行状態をそのままに転写している点で共通し、記法の差はあっても単語上は綴字法の変母音、子音の t と th, tt, y, d などの差が中心であり、KA の各巻末に難語の差異、類同を示したグロッサリーにみられるような、いわゆるスイスドイツ語ないし時代文化を反映して別義異義を呈するとき差には及ばぬ範囲内のものである。しかし、一方、両者はその

テキスト・クリティークでも言及せぬままにしているタテ線で抹消した部分などの収録や復活の仕方に関しては異なっているし、ルプレヒトが筆蹟も筆記具も同じものでうったページを踏襲するのに対し、児玉は KA と同様の二次的にうたれた順序を採用し全体の編成に差をひきおこしている。しかも、児玉のファクシミリには、ルプレヒトのそれにはない二次的にうたれた番号があり、同一紙の表裏にわたるものが、前二者では移動するのに比し、ルプレヒトは完全に原初型を踏襲している⁹⁾。

校定が純粋に技術的な条件のもとにあるべきだとしても、たとえばニーデラーのごとく、テキストが校訂者個人やその集団、さらには体制のイデオロギー的認識利害が規制条件から完全に自由であるとは限らぬし、根本資料の公刊自体が検閲の対象となったり、それからカムフラージュされることすらありえた。また、ペスタロッチ研究の動向には、教育学動向の事実が投影されており、それが研究の余地や展望の可能性を提供する面と、その反対に研究のみならずテキスト作業すら規定し相対化する場合があった。ことに校定から解釈のレベルに事態が移行するにつれ、その解釈に基礎条件としての校定テキストの問題性が表裏両面で影響を及ぼす。したがって、われわれが『ノート』研究に着手する場合も、シェーネバウムの校定テキストとその精神史的研究との連関した表裏関係を念頭におく必要がある。筆者は旧稿において、KA の『ノート』でペスタロッチにみられる社会批判のラディカルな層位、自然概念の、先験的でなくむしろ経験的な人間学的構造、非ヨーロッパ的習俗への人類学的関心に注意し、従来の先行研究には最前者と最後者への注視が十分でなかったことを粗描したが、その後ペスタロッチに彼の教育行為を弁証するために「反政治性」を主張したり、精神科学的立場への還元へ急ぐ研究の多さを警戒するに至ったし、またシェーネバウムすらこのテキストの未定型を自己の精神史的研究への傾斜やそれとの整合性に向けた関心が転写と収録の選択のさいに影響すると考えることも、少くとも理論的には可能だとみるに至った。

そこで、KA に収録の部分とこの『ノート』の MS 全体—Handschriften der Zentralbibliothek Zürich, Nachlaß von Joh. Heinr. Pestalozzi, No. 315～321, 332～333, 338～344, 355, 357 および旧 Beliner Lehelerbibliothek, 現東独教育学アカデミー・アルヒーフ蔵の7枚 (KA. 10. 206～209 の C.J. Catteau. Tableau général de la Suede, 1790, Bern の抜書き他一種とひとつのアフォリズムに対応) —を照合し点検した。その結果、これらの KA の束のうち、シェーネバウムが J. Waser の図書メモだという冒頭の1枚をふくめて、転写収録されていない個所を部分的ないし全体的にもつ MS は、277枚にのぼり、その行数は4460行、もし KA を補綴するとすれば、その個所はに271に及ぶことを確認した。

2. シェーネバウムの作業の7つの問題点

なぜ、かくも多くの欠落が発生したのか。シェーネバウムの力をもってしても、また KA の権威にもかかわらず、なぜこのように多くの分量が放棄され未収録のままになっているのか。あるいはそうならざるをえなかったのか。さらに、その後のペスタロッチ研究は、いかなる理由でこの部分に着手せず余50年が経過したのか。ここには、ペスタロッチをめぐる論議への新たな可能性が、たと

えば彼の思想的理論的形成、伝記的部分などの契機や背景について、ひそんでいないかどうか。いわゆる紛失不明原稿については、デーユンクのいうように問題は大きいし、ペスタロッチの生前の出版刊行物の浄書稿でも、たとえば『夕暮』、『ゲルトルート』、『シュタンツだより』などの有名作品のは残っていない¹⁰⁾。初期作品にはイーゼリンの意向や修正の手が入り、後期には『基礎陶冶の理念—レンツブルク講演—』のようにニーデラーが強く関与し、その時期の『夕暮』のテキストは原型から逸脱して改ざんに等しい場合のあるのも知られるとおりである。しかし、逆に諸般の事情でMSのまま陽の目をみず、定型化せぬ段階にとどまった場合、その形式上の完成度の低さは、いわゆる遺稿発掘をとおして解明される事例一般がみせるごとく、むしろ問題関心の原型や深さ、主題の範囲や大きさを示すことがある。ことにこの『ノート』のように情報収集の段階とその途上での直接的な反応を併記する場合は、いわれているごとき天才ペスタロッチの独自な面目を強調する視点や、この時期に「本は読まなかった」(13. 196) という彼自身の記述のいずれにも反する裏面などの批判的吟味をふくめ、彼の生々しい思考過程がうかがえるし、また検閲や交友関係をふくめ言語の社会的制約に及ぶ以前の、直接的な場面がみられ、そのかぎりでは資料としての重要度が生前刊行物より高くなる。

シェーネバウムによる原資料の転写作業と解題をふくむ客観的地平への位置づけや解釈についての業績は、そのもっとも均整のとれた成果の点でペスタロッチ研究史上の白眉であることには異論は少ない。しかし、彼の力と関心をもってしても、この『ノート』がKAのなかで特殊な、未完の形をとり、収録しえぬ部分を多く残した事実を考えるならば、そこにはMSをめぐる次のごとき原因理由・条件が浮かび上る。

1) 判読の困難ないし不能。これにはMSのインクのしみやとびちり(執筆後もそれ以前のもある)、手すき紙の上下左右、ことに右端と下部の損傷といった原因や、年月の経過のなかでインクが希薄になるといった化学的原因、さらには保存状態の不十分さが働いている。筆記具や用紙などもふくめ、たとえば彼と交流のあったK. Lavaterらのそれに比し雲泥の差がみられる。その上KAの校定者を悩ませたペスタロッチの筆蹟も判読の困難を増幅している。それは、イーゼリンのいうように「その手蹟、正書法、句読法の判読しがたい乱れ」(1. V)にもよるし、ペスタロッチ自らみとめるごとく「欠陥のある」(B. 3, S. 525) ものだった。『リーन्हルト』の原稿の修正にイーゼリンに「思いのほか骨をおらせ」、J. Bodmerと共に師にあたるJ.J. Breitingerも「不正確かつ非文学的」だと評したが(3, 455; R. 10. 518)、ペスタロッチの側にむしろ判読を妨げる大きな原因があった。イーゼリン宛の書簡の言を借れば、『夕暮』をめぐる「自分の原稿の不正確なことのため(Wegen der immer noch unrichtigen Sprach meines Manuscripts) 苦勞をかけ」(B. 530. 28. [Sept. 1780])、「自分の文章の不明さ(die Dunkelheit meiner Aufsätzen)」をわびている(B. 526, [Januar 1780])。

2) 論旨などの意味不明瞭。これは執筆の中断や抹消、追加記入、加えて抜書きと自分の感想や論評との混在からきている。また、余白の少ない欄外の紙面を二次的にタテ書きに使用しており、そ

れがあわさって 1) の場合を助長している。ペスタロッチが欄外に付した記号などには、NB (nota bene), N (nota), N, N, ?, ×, +, ⊕ のほか、文、句、語への一本ないし二本の下線や斜線、複数にわたる大きいマルかっこやカギかっこ、これらが強い筆致で様々に記されている。しかもこの場合は、用紙の右側の三分の一から二分の一弱に及ぶ余白のときに多く、二次的に記されているのも注目される。そして、タテ、ヨコ両用で追加記入したコメントは 6 例であるのに反して、上の記号化した反応がほとんど同じ筆勢、筆記具、インクで記されている。シェーネバウムはとくに欄外の見出し語を重くみて、それをほとんど余すところなく紹介しているが、解読の過程で明らかに彼自身のものとわかる小さい? と? のマークが段落を単位としてうたれ、KA 未収録部分をもつ MS に限っても全体で約 130 個のうち? が約 70 個みられる。しかもそのうち KA に収録された部分のマークが斜線で抹消され残り約 60 個所が未収録なのは転写作業の難度を示すものといえよう。

3) 抜書き、ことにそのフランス語部分の除外ないし軽視。校定上の明言された原則ではないが、抜書きの該当ページの多くを明らかにし、ときにその原文との比較対照表を示しながらも、一方では転写し収録に至らなかった部分が多く、統一されていない。ことにフランス語論著の抜書きの大部分は収録から除外されている。したがって、事実としては、抜書きとフランス語の部分が収録すべきテキストの範囲に入っていないのが判明する。しかし、この『ノート』は、ペスタロッチ自らの執筆メモないしはその断片とみなしうるもの、執筆準備のための抜書き、一般的関心事や自分の私的的心理的内容をその課題や背後動機とし、抜書きではフランス語部分のきわめて正確なそれや、要旨、トピックスの抽出など幅もひろいが、これらのいずれにも、注記や見出し語のほか上の 2) の種々のマークを付けるところからみて、そこには彼の思考過程の軌跡が示され、その思想形成の重要な契機となっている面がうかがわれる。したがって、この点はとりわけペスタロッチの執筆内容をテキストとして提示することに中心があったシェーネバウムに比しさらに重視して究明する必要がある。

4) 本人以外の筆蹟部分の除外、上の 3) でのべた抜書きでは、まず夫人アンナがそれをおこない、のちにペスタロッチ自身がマークを付している 312 行がそれである。なお、付言すれば、この MS の束の最初にタテ・ヨコ 225×220 ミリの変型サイズで右下方約 60×140 ミリが破損しながら、そこに 14 種の著者、書名、出版地、サイズのほか価格をも記した 1 枚の重要な MS がある。これは、シェーネバウムによれば、当時ペスタロッチが参画した組織のひとつ幸福振興協会 (Allgemeine Gesellschaft zur Beförderung sittlicher und häuslicher Glückseligkeit) の幹事 J.J. Waser の手蹟である。

5) 欄外見出し語による代替。ペスタロッチがひとまず書いたあと二次的に記した場合が多い見出し語を重視したシェーネバウムは、それを 1) と 2) の要因が手伝って解題的説明のなかに示し、転写の代替をさせるかのごとく扱い、その結果本文が未収録になった場合が多い。しかし、その「解題」が KA の通常のテキスト・クリティークと事項説明のそれに比し、量質ともに及ぶべくもない簡略化をしているのも否めぬ事実である。

6) 校定者の研究視角および時代の教育学動向に規定された認識関心の侵入。シェーネバウムの

研究成果である伝記的四部作は¹¹⁾、1920年代からはじまるディルタイ派の文化教育学の系統にあって、いわば一種の文化価値の客観主義や精神史の立場にあり、二次大戦後の研究動向がみせたごときペスタロッチの実存的・心理的・政治的なさまざまな状況での緊張、葛藤、矛盾、場面への掘下げは逆に少ない。それに、『ノート』への評価と把握の重点は、著作刊行の目的からしても、当然執筆構想にあった。また、たとえば『ノート』の内容となる論著の一覧化で27種が示されているが¹²⁾、子細に点検すれば、読む予定のものなどを含めると、そのタイトルは最大限2倍強の70余種に及ぶ。もちろん「このMSの文章が無数の価値をもち、かつ文献の砂漠ともいふべきものであって、この時期のペスタロッチを知るには、なによりまず抜書きの荒野を徹底的に調査せねばならない」¹²⁾、としたシェーネバウムであったが、実は彼がその論及で示す上の差と取捨選択をしたなかに、KAテキストを左右する条件が潜在しているとみることができる。

7) 当該部分のKA発刊当時におけるペスタロッチの研究解明の不十分さ。シェーネバウムを規定したこの条件は、上の発言にみられるごとく、将来のみとおしや課題に対する校定者の現実的かつ研究上の制約となっている。ちなみに『ノート』の当該巻号の刊行は、1930年から33年、シェーネバウムがその時期を扱った著書は、1937年である。転写の可否、収録の採、不採の決定要件は、単に技術的なそれだけではなく、ことに『ノート』と関連の深い『探究』の草案、決定稿その他の完備した刊行はその時点でなお決して十分とはいえず(1938年)、とりわけ『ノート』の周辺や背景ををさぐる重要資料としての書簡などの条件も同じだった。時期の上では後期が中心でバラツキがあるとはいえ、たとえば作品の所在確認点数は、1927年で160点、80年で300点、書簡は1927年で1,500通、80年で6,250点、現在は6,390点といった格差がある¹³⁾。それにKAの編集の統一方針である事項説明を、もし他の作品と同等程度に仕上げようとすれば、ことにKAの『ノート』に限っても該当する総ページ218ページのなかで190人に及ぶ登場人物の名は、10巻本のRascher版の人名索引が238名であるから、きわめて多く、かつ未収録部分のそれを加算するとさらに増えKAの付説はひじょうに大部になったであろう。それほどになお知られざる未踏の部分を残しているのである。

3. ペスタロッチのもうひとつの執筆方法 — 調査による執筆 —

『ノート』のMSにはそのアルファベット符号からして惜まれるべき紛失があるが、内容上は体系的作品の欠落に比べれば、その資料的価値の低下はむしろ少ないといえる。この『ノート』はテキストとしての決定稿になる完成度においてではなく、むしろペスタロッチの思考過程、執筆方法、私的手記などをめぐる資料として他の諸作品にはない固有の希少価値をもち、その点から独自に評価されるべきである。それは研究一般がそうであるように、ペスタロッチにもあったその準備作業としての調査研究的な側面や段階が示されているきわめて重要な資料だからである。従前のペスタロッチ研究では、生前刊行のいわゆる有名作品の継起に連続、発展、転換が論じられてきたが、これに反して研究のはるかに遅れているのが、構想的草案、浄書稿、出版をめぐる改稿、さらには再版のための改筆などの研究であり、もうひとつは、これらの連続、発展、転換や修正を論じる場合に媒介となるこの『ノート』のごとき存在への着眼である。

